

第八章 村の生活誌

第一節 人物点描

一 大庄屋をめぐる

延永長者と 勝山町黒田の観音山（鹿峰山、鹿ヶ峰とも呼ばれる。標高三三二^尺）中腹には、胸部疾患に利益があるとされる「胸の観音」（現天台宗観音寺）が所在する。この観音にまつわる伝説には、細かな点で相違する数種類のものがある。一例として『京都郡誌』（大正七年・京都郡役所）所収のものの要旨は次のとおりである。

「京都郡池田村（現勝山町）には小松池という垂仁天皇の御代に築かれた溜池がある。今の小松池は小さいが、かつては満々と水をたたえ、どんな旱魃でも干上がることはない池で、しかも、この池には大蛇が住んでいた。昔、京都郡延永村（現行橋市）に延永長者と呼ばれる大金持ちがいた。延永長者は広大な耕地を所有していたが、ある年未曾有の旱魃にみまわれ、自ら所有する千町の田が旱損を受けそうになった。そこで長者

は小松池へ赴き、大蛇に降雨を願い、もし願いが叶うなら三人いる自分の娘のうち一人を供することを申し出た。すると、すぐに大雨が降りだし、稲の全滅は免れ、若干の収穫をあげるこゝとが出来た。しかし、その代わりに娘一人を差し出さねばならず、長者が思い悩んでいたところ、事情を知った末娘が自ら小松池へ赴いた。末娘は池辺に組まれた櫓に上り、法華経を読経し、一卷読み終わるごとに、水中より首を出した大蛇の角に経典を掛けた。そして、八巻全てを角に掛け終わったところで、大蛇は大きく震えて消滅してしまったのである。それで、娘は延永村に帰ろうとした。ところが、途中、観音山の麓で胸痛に襲われ、娘はそのまま亡くなってしまった。そのため、娘の靈魂を観音山の岩窟中に祀り、胸の観音と称するようになったのである。後に、岩窟が山の峰にあるので、峰の観音と改称された」

観音山は、明治時代以前は等覚寺（現荊田町）の山伏が峰入りをしていた霊場で、「峰の観音」と呼ばれていたが、明治になって胸部疾患に利益のある「胸の観音」として信仰されるようになったとし、『京都郡誌』所収の伝承とは、「峰の観音」「胸の観音」の順序が逆をいうものもある（『福岡県百科事典』）。いづれにしても、基本的なストーリーは同じでも、細かな部分で相違する何種類もの伝説が伝えられていること自体、胸の観音に対する人々の信仰が厚かったことの証であろう。また、胸

の観音にまつわる伝承は、様々な信仰的要素が織り込まれているが、とくに水神信仰、竜神信仰との関係が強いのは、「嫁に行く」として黒田にゃ行くな、広い黒田に川が無い」（『京都郡誌』）とまで里謡に歌われた、京都平野南西部の水事情を映しているのかもしれない。

延永長者とは誰か

史実と伝説を混同することは、歴史を著述するうえで最も避けなければならないことである。しかし、ここでは敢えて「胸の観音」伝説という「延永長者」のモデルがいたと仮定しよう。その場合、誰を想定できるか考えてみると、最も「それらしさ」を感じるのは京都郡延永村（現行橋市）の山本氏である。このことは、すでに以前から指摘されている（古賀武夫『村上仏山を巡る人々』）。「長者」は主に「お金持ち」の意味だが、江戸時代は大庄屋のことを地元で「長者」と呼ぶことがあったようである（「親方様」とも呼ぶ）、このことも山本氏Ⅱ「延永長者」のイメージと重なるところである。山本氏がいつごろから大庄屋を勤めるようになったのか未詳だが、古いところでは享保十五年（一七三〇）の延永村春日神社棟札に「延永弥左衛門」とあり（山本氏は代々「弥左衛門」を名乗ることが多かった）、この時点で既に延永手永大庄屋を勤めていることが分かる。延永村には江戸時代初期からの山本氏一族の墓石群があることから、同氏は中世土豪層の系譜を持つと考えられ、江戸時代はかなり早い時期か

ら代々、庄屋・大庄屋を勤めていた可能性が高い。

ただ、山本氏Ⅱ「延永長者」は敢えて歴史と伝説を混同して考えた場合の推測であり、このことをあまり深く追求しても意味がない。前掲の古賀武夫『村上仏山を巡る人々』では、天保年間に延永手永大庄屋・山本弥左衛門が、何らかの罪で処罰されたことに關して、彼が延永長者伝説を口に滑らせたため「自家を長者に擬するとは、上を畏れぬ不埒な思い上り、只では済まされぬ」と藩に断罪された、と推測している。しかし、ここまでの憶測は行き過ぎであろう。

黒田忠兵衛

細川忠利は、父・忠興の跡を受けて藩主に襲封した翌々年の元和八年（一六二二）に、領内の人数・家数・牛馬数の調査（人畜改）を行った。村単位で調査した数値を郡ごとに一帳にまとめたもので、現勝山町域の村々は、元和八年七月五日付の「京都郡人畜御改帳」（財団法人永青文庫所蔵）に収録されている。

現勝山町域でいえば、人畜改帳が作成されたころ、惣庄屋は岩熊村に居を構え、岩熊孫兵衛を名乗っていた。しかし、それから細川氏が肥後へ転封するまでの時期に、新たに黒田手永が立てられ、黒田村が惣庄屋の居住村となった（以来、黒田手永は明治初期まで存続）。

寛永八年（一六三一）から慶安三年（一六五〇）まで黒田手永の惣庄屋を勤めていたといわれる人物に、黒田忠兵衛の名が

伝えられている。忠兵衛は、島原の乱に出陣し、小荷駄方宰領をつとめた。また、黒田村の字畑ヶ田、中ノ原、大田尾の荒地開墾のため、長川村東方に池を築き、ついには数十町の農地を開いたといわれる。藩はその功を賞して、長六〇間・幅二間の土地を与えたという（『京都郡誌』）。ただ、残念ながら、今のところ一次史料で黒田忠兵衛の足跡を確認することは出来ない。

久保作右衛門

天保十二年（一八四一）、久保手永大庄屋に就任した人物に畑作右衛門という人がいた（在任中は手永苗字「久保」を名乗る）。築城郡安武村の出身であることだけは分かっているが、久保手永大庄屋になる以前の経歴は未詳である。大庄屋になるくらいであるから、それなりの能力と人格を持ち合わせていそうなものだが、実際はとても大庄屋になるような器量の持ち主ではなかったようだ。

天保十五年（一八四四）四月、何があつたのか分からないのだが、作右衛門は大庄屋を免職となり、取り調べのうえ、六月に領外追放の罪に処せられている（『仏山堂日記』）。よほどのことをしでかしたのであろう。彼の、その後のことは分からない。

畑作右衛門の実兄に畑市六という人がいた。この人の人生についても詳細は不明だが、安政元年〜同六年（一八五四〜一八五九）に安武手永大庄屋（八田手永大庄屋兼帯）を勤めた後、

文久三年（一八六三）八月十日に死去したことだけは分かっている。盟友で企救郡・京都郡の大庄屋などを勤めた中村平左衛門（当時は平右衛門）は、市六の訃報に接した際、その人となり等について次のように述べている。

市六事は我等若年よりの親友にて、誠二兄弟の如く付き合い候処、五年已来同人事務財の事に付慎み仰せ付けられ候て、此方へ参り候事もこれ無く、疎遠に打ち過ぎ候処、当八月十日急病にて相果て候趣伝え承り候間、今日一人遣わし候、同人義は至って才子、勤方の事も功者、節檢質素の生質にて、大庄屋をも数年来相勤め、去る寅歳六郡帳面御調子これ有り候節も、我等と同様六郡調子役の吟味方も仰せ付けられ候もの也、然る弟に作右衛門と申す人これ有り候、此者希代のやましにて、兄市六に迷惑を掛け、右様慎み仰せ付けられ候場に至り候趣也

（『中村平左衛門日記』第十卷、文久三年十月五日条）

文中にある「寅歳六郡帳面御調子」とは、嘉永七年（一八五四）八月に行われた、過去五年間にわたる年貢関係帳簿の調査である。この調査は、村役人層の不正を糾すため、家老島村志津摩の主導で行われたものである。私曲が露見しても処分しない、との約束で始まった調査であつたが、京都郡は大庄屋全員が罷免されるなど、大規模な粛清が実施された。畑市六は、中村平左衛門とともにその調査役兼六郡吟味役を勤めたのである。中村平左衛門と畑市六が「若年よりの親友にて、誠二兄弟の如く付き合」っていた、その接点がどこにあったのか分から

ない。同一階層で形成された社交グループの仲間であろうか。中村平左衛門が書いていることが本当であれば、畑市六は「希代のやまし」（山師＝詐欺師・ペテン師）である弟・作右衛門に足を引っ張られ、「才子」で、「功者」で、「節檢質素の生質」も潰されてしまった。悲運としか言いようがない。

二 宗教者

蓮井雲溪

下田村の三会寺は、菩提山四十九院の一つで、最澄の開山と伝えられ、延暦年間から天仁年間のころ（七八二―一一一〇）までは、大伽藍を誇ったと言われる。戦国期、大友の兵火によって菩提山四十九院のうち四十六院は灰燼に帰し、残ったのは菩提村宝積寺、当村霜田寺、そして三会寺のみであったという。それ以後、同寺は衰微の一途をたどり、住僧も禪宗・真言宗・真宗と、その時々によってまちまちであったと伝えられる。正徳元年（二七一）に仲津郡今井村（現行橋市）真宗大谷派浄喜寺弟子の恭海が、本堂・庫裏を再建して以後は浄喜寺の末寺となった。しかし、その後も浄喜寺から住僧が派遣されたり、無住になったりを繰り返したが、嘉永年間（一八四八―一八五四）ごろに、田川郡川崎村（現田川郡川崎町）光蓮寺（浄喜寺末）の蓮井雲溪が住持となつてからは、寺の経営も安定したようである（明治五年「宝暦度書上落末寺・末庵・小庵・小堂帳」浄喜寺文書他）。明治十二年（一

八七九）、蓮井雲溪は下田村霜田寺跡の建物・不動産（霜田庵と呼ばれる小堂があった）を購入。翌年には三会寺の名称を光円寺と変更する許可を得て、当該地に光円寺が新築された（『京都郡誌』）。その後、光円寺は明治三十四年（一九〇一）に上久保（現勝山町）に移転したが、後年無住となり、平成三年の台風によって建物は全て失われてしまった。

なお、蓮井雲溪の学徳の高さは本山も認めるところで、明治十八年（一八八五）七十五歳で没するまでに、大谷派内において極めて高い学階にまで昇進している（『豊前人物誌』）。精力に数多くの説法をこなし、その平易な語り口は人気が高かった。また地域住民からの信頼も厚かったことが当時の史料からうかがえる（『仏山堂日記』他）。

佐藤種

明治八年（一八七五）三月、中黒田村権現山の佐藤種邸内にあった塾舎を仮校舎として小学校が開設された。後に上黒田の村上氏宅を仮校舎にしたが、同九年（一八七六）十二月に再び中黒田村字勝山へ移り、勝山神社境内の空家などが校舎に利用された（『京都郡誌』）。その中黒田村勝山神社は、藤原広嗣にまつわる縁起を持ち、江戸時代には勝山権現あるいは飯岳権現と呼ばれ、里修験の山伏が管掌する社であった。かつては、雨乞いに靈験があると、周辺の村々から厚く尊崇されていた。江戸時代末、当社別当の胎藏院智証は、上稗田村（現行橋市）の漢詩人・村上仏山と親交のあった